

人を対象とする生命科学・医学系研究に関する公開情報

研究機関名：筑波メディカルセンター病院

倫理審査承認日： 2025年8月20日
研究課題名： 多機関共同データベースを利用した前立腺癌における予後と予後予測因子の検討
研究期間：研究実施許可日～2031年3月31日
研究対象： 2000年1月1日～2025年7月31日に当院で前立腺癌に対して治療を受けられた方
<p>対象材料</p> <p><input type="checkbox"/>病理材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/>生検材料（対象臓器名）</p> <p><input type="checkbox"/>血液材料 <input type="checkbox"/>遊離細胞 <input checked="" type="checkbox"/>その他（診療情報）</p> <p>上記材料の対象期間 西暦 2000年1月～ 2025年7月</p>
<p>意義・目的：</p> <p>日本における前立腺癌新規罹患数は増加の一途を辿っており、2019年の男性癌新規罹患数第1位は前立腺癌でした(国立がん研究センター)。今後さらなる新規罹患数の増加が予測されています。前立腺癌の多くは限局癌として発見されますが、約12%は転移を伴う進行癌の状態で発見されています。進行前立腺癌に対してはアンドロゲン除去療法(androgen-deprivation therapy: ADT)が標準治療とされてきました。近年は新規アンドロゲン受容体シグナル阻害薬(Androgen receptor-axis-targeted agent: ARSI)が主流となっていますが、数年後には多くの症例で抵抗性を獲得し、去勢抵抗性前立腺癌(castration-resistant prostate cancer: CRPC)となります。CRPCに対しては ARSI やドセタキセル、カバジタキセルなどのタキサン系抗癌剤、PARP 阻害剤などが使用されますが、最終的にいずれも治療抵抗性となり癌死に至ります。様々な薬剤が使用可能となっていますが、最適な投与順ははつきりとわかつていません。また、近年は ARSI が主流となっていますが、医療費の観点からも全ての患者に使用することが必要なのかといった疑問点があります。本研究では、様々な病期の前立腺癌に対し、薬剤別の奏効率、無増悪生存期間、全生存期間、副作用、予後予測因子などについて後ろ向きに検討します。</p>
<p>方法：</p> <p>2000年1月1日から2025年7月31日までに当院泌尿器科および共同研究機関で治療開始された前立腺癌患者様に関して、診療情報（年齢、性別、病名、臨床病期、副作用など）のデータを利用して頂き、背景因子、臨床病期、副作用などを用いて、前立腺癌に対する治療の有用性、副作用、予後予測因子などについて解析します。</p> <p>学会・論文などに公表するデータは集計データであり、個人が特定されることはありません。また、本研究で得られた情報は、個人名・診察番号は記入せず個人が特定されないよう配慮します。なおこの研究への情報提供を希望されない場合には、下記の問い合わせ先にご連絡ください。その患者様の情報</p>

は利用いたしません。その場合でも診療上の不利益が生じることはありません。

問い合わせ等の連絡先

筑波メディカルセンター病院 泌尿器科

小峯 学 (代表番号 029-851-3511)